

## 事業完了報告書（東大阪市）

### 調査研究期間等

調査研究期間	令和5年5月31日 ～ 令和6年3月15日
調査研究事項	<p>≪委託研究：夜間中学における教育活動充実に係る調査研究≫</p> <p>I. 教育課程、教育環境整備に関すること</p>
調査研究のねらい	<p><b>【東大阪市立意岐部中学校】</b></p> <p>①中学校教育を実施するために必要な高齢者向けの教育課程の在り方</p> <p>本校生徒の平均年齢は約43歳ではあるが、60代以上の生徒が20%以上おり、生徒一人ひとりの生活背景や状況、学習経験も異なっている。そのなかで、生徒の主体的な学びの支援と学びの循環を意識し、昼間部や学区の小学校などの学齢の子たちとの交流や、その他外部団体との交流等も含めた、多様な学習機会を提供するための研究を進める。また、自らの知識や経験を社会に還元し、生きがいを学校生活の中で見つける、または生きがいをさらに深めるために、自己の人生経験と照応しながら綴る文集「おとなの中学生」の作成に取り組む。さらに、養護教諭とも連携しながら健康診断の結果や今後の生活の見直しを、教科の授業と横断しながら取り組み、元気で活力ある生活を送ることができるようにする。</p> <p>②不登校経験者（学齢生徒も含む。）の支援の在り方（相談体制の整備の方策を含む。）</p> <p>不登校経験者は、ある一定の期間の学習内容や経験が得られていない場合が多く、また、学校活動に対しての不安が強いことも考えられ、一人ひとりと丁寧に向き合い、想いを聞く必要がある。こういったことから、どの教科の授業でも、生徒同士のつながりを意識しながら取り組むための仕掛けを模索したり、スクールカウンセラーと連携したりして、相談体制の充実を図る。</p> <p>また、自分の経験を語ったり、綴ったり、表現したりする取組を推進し、「おとなの中学生」作成につなげる。</p> <p>③中学校教育を実施するために必要な日本語指導の在り方</p> <p>一人ひとりの学習経験が多岐にわたるため、二者懇談などを利用してそれぞれの状況や想いを丁寧に聞き取る。また、日本での生活者として必要な日本語を中心に指導することで、中学校教育に必要な日本語の習得もめざす。書くこと、話すことを中心に行いながら、母語で安心して話ができる環境も確保する。2019年度から毎年「日本語指導が必要な帰国生徒・外国人生徒入学者選抜」を受験し隣接する大阪府立布施北高等学校に進学していることから、10代の外国人生徒の進学保障、追指導について研究をすすめる。生徒の母語対応の充実を図る。また、自己の人生経験と照</p>

応しながら「おとなの中学生」を表現豊かに綴れるように、教科横断を意識しながら日本語指導に取り組む。

#### ④ ICTを活用した生徒の学習活動の支援の在り方

ICTリテラシーを生活の基礎能力として学べるように、タブレット端末を積極的に活用する授業を展開する。とりわけ、かねてから夜間中学の課題である欠席者への対応や、反復練習や繰り返し学習をできるだけ前向きに取り組んでもらうために、AIドリルや家庭学習にもタブレットを活用するなど、身近な学習ツールとして使用するなかで、生徒の学びを保障し、学びを通して得られた経験をもとに、「おとなの中学生」を綴ることにつなげる。

以上の研究を進めるうえでは、教材に視覚的や感覚的に工夫が必要であるため、今回の事業での消耗品を活用し、本校独自の教材の作成・配付・活用を進める。また、それらの教材を布施夜間学級とも共有しながら、進めていく予定である。

全体を通して、中学校区全体で、夜間中学の存在を校区の特色に組み込み、意岐部中学校区ブロックにおいて、小中学校の児童生徒との交流や意岐部フィエスタでの発表を行い、夜間中学の豊かな学びを追及する。また、社会福祉協議会との連携を深め、夜間中学の存在が必要な人に届くように、相談体制の強化を図る。

#### 【東大阪市立布施中学校】

##### ① 中学校教育を実施するに必要な高齢者向けの教育課程の在り方

本中学に在籍する65歳以上の高齢の生徒は戦争や差別など、様々な理由で義務教育を受けることができなかった生徒である。日本語での会話はある程度できるものの、文字の読み書きについては定着していない生徒がほとんどである。夜間学級で学び、手に入れた文字で自らの思いや生い立ちを綴り、発表し合うことで自己肯定感を培い、ともに学ぶ仲間を大切にす意識を涵養する。また、AIドリルの活用を積極的に実践する。これらの学びを「おとなの中学生」作成につなげる。

##### ② 不登校経験者の支援の在り方

生徒の実態を踏まえた、個に応じた指導を工夫するとともに、社会参加の幅を広げるために必要な基礎学力の育成に努める。また、令和5年度は特別支援学級が設置されることになっており、支援の必要な生徒が安心して学び、安定的に登校できる場所となるよう運営する。加えて、仕事もっているが、上司や同僚と人間関係を築くことが難しいと感じている在籍生徒に対し、よりよく社会生活を送ることを目指し、ソーシャルスキルを

	<p>向上できるような支援を実施する。</p> <p>③ 中学校教育を実施するために必要な日本語指導の在り方 日本語指導支援員によるきめ細やかな支援を行う。授業時間外を利用したり、授業への入り込みや抽出による支援を行ったりと、生徒の実態に応じた工夫をする。また、できる限り授業補助の教員が入り込み、翻訳機などを駆使して学びをサポートする。また、意岐部夜間中学や近畿の夜間中学と連携し、日本語指導についての実践や情報収集に努める。</p> <p>④ ICTを活用した生徒の学習活動の支援の在り方 iPadについて、筆順アプリを使った文字の学習や、カメラを使った植物の観察、体育の動きの確認、また調べ学習などで活用してきた。それに加えて、AIドリルを使った個別の学びや、特に若い世代の生徒の家庭学習を推進する。</p>
<p>調査研究の成果</p>	<p>【意岐部中学校夜間学級】</p> <p>① 中学校教育を実施するために必要な高齢者向けの教育課程の在り方 今年度から、補食給食の時間を15分から20分にしたことにより、生徒が自ら主体的に取り組むことができる活動が増えたことで、異年齢間の交流にもつながった。また、中学校区のイベントにも立て続けに参加することで、学齢の子どもたちとも交流ができ、その中で自分の想いや経験を綴った作文を発表することで（年間合計5回）、自らの知識を社会に還元することや、交流の感想などから、自分たちのとりくみが様々なかたちで周りに伝わっていくことに達成感を覚えた生徒も数多くいた。</p> <p>② 不登校経験者（学齢生徒も含む。）の支援の在り方（相談体制の整備の方策を含む。） 今年度は、コロナ禍以前よりもたくさんの外部団体との交流をもてた。近畿夜間中学校連絡協議会の生徒会連合会のとりくみに参加し、他校の生徒が自分のことを綴り、語っている場面を聞く機会も数多くあった。その中で不登校を経験した生徒は、自分の経験と重ねて考える機会が数多くあり、自分の生き方をさらに考え始めることができた。また、校内生徒会では、より多く生徒同士の交流をもつ機会を作るために、生徒が主体的に話し合い、クラスはもとより、学校全体が互いに刺激し合うよりよい集団づくりにつながった。</p> <p>③ 中学校教育を実施するために必要な日本語指導の在り方 一人ひとりの学習経験が多岐にわたるが、生徒の日本語能力の習得状況を教職員同士で交流する機会をたくさんもった。また、アンケートなどを用いて、生徒の日本語の状況を把握することにも努めた。すべての教科を</p>

横断して、日本語学習が進むように授業内容を工夫し、研究発表公開授業の際は、日本語指導にこだわった授業案や当日の研究協議の柱についても教職員全員で検討した。

府立高校の「日本語指導が必要な帰国生徒・外国人生徒入学者選抜」に3人が受験した。授業時間に抽出するだけでなく、0時間目の補習を設定し、ほぼ毎日、全員教職員がかかりながら日本語学習を進めた。

#### ④ ICTを活用した生徒の学習活動の支援の在り方

AIDリルを積極的に活用することで、個別最適な学びを提供することができた。すべての教科を通してICTタブレットや電子黒板を活用しながら授業を行うことで、生徒の授業理解につなげた。また、キーボードを利用したタイピングも積極的に行った。今後は、タブレットの持ち帰りなどを利用して、家庭学習にも活用していきたい。

①～④を通して、たくさんの経験を重ねるなかで、行事ごとに自分の想いを感想文という形で定期的に綴ることを、1年を通して行った。そして、その都度自分の生き方や想いを見つめ直しながら「おとなの中学生」を綴った。綴った作文をクラス内で発表しあい、クラスの代表を決め、校内作文発表会につなげた。

#### 【東大阪市立布施中学校】

##### ① 中学校教育を実施するに必要な高齢者向けの教育課程の在り方

年間を通して文字を学ぶことや、美しく書くこと、自分の想いを綴り伝えることに取り組んできた。そして夜間学級で学び、手に入れた文字で自らの想いや生い立ちを「おとなの中学生」に綴ることができた。それを仲間の前で発表し、共感的に聴き合うことで、自己肯定感を培い、ともに学ぶ仲間とのつながりを大切にする意識を高揚することができた。また、屋間部の生徒や、布施中学校区の小学校との交流の機会を作ることができ、自分自身の人生経験や夜間学級で学ぶ意味などを確認しながら児童生徒に伝えることができた。また、布施中学校以外の近隣の中学校からの訪問を受け、交流をもつことができたことは大きな成果であった。今後も布施中学校ブロックを中心に連携を深めながら、年間計画を立てて交流を進めていきたい。

##### ② 不登校経験者の支援の在り方

今年度も不登校経験者で、学び直しを希望される生徒が増加した。個に応じた指導を工夫するとともに、社会参加の幅を広げるために必要な基礎学力の定着に向けた学びを進めることができた。今年度設置された支援学級に在籍する生徒で、特に10代の生徒については、保護者や本人のニーズを丁寧に聞き取り、学校生活の情報共有を綿密に行いながら学習に取り

組むことができた。集団生活の経験が非常に乏しいため、クラスでの学習を大切にしながら、支援学級でのソーシャルスキルトレーニングにも取り組んだ。職場での人間関係に課題のある生徒もあり、多忙さからなかなか登校できない生徒には、i P a dを持ち帰り、教員とチャット機能を使って学習状況の共有や課題のやり取りを進めることができた。

また、自身が学齢期の時に覚えていた学校生活や対人関係での不安や、当時の思いなどを「おとなの中学生」に綴った。それを全校生徒の前で発表し、共感的に受け入れられたことで自己肯定感の高揚につながった。

### ③中学校教育を実施するに必要な日本語支援の在り方

一人ひとりの日本語習熟度や夜間学級入学に至るまでの学習経験には大きなばらつきがある。日本語指導支援員の抽出による日本語学習を丁寧に行った。また、通訳者の授業への入り込みや懇談時の支援など、母語で安心して話ができる機会を確保することができた。入学時の面談や二者懇談において、特に進路の希望については丁寧に聞き取りを行い、できるだけ希望する時期に進学できるよう取り組みを進めてきた。今年度は6人の生徒が高等学校に進学を希望している。この6人をはじめ、日本で仕事をして生活をしていくことを望む生徒は、未来の自分の姿をイメージしながら、今思い描く夢を「おとなの中学生」に綴ることができた。

### ④ICTを活用した生徒の学習活動の支援の在り方について

個別最適な学びを考慮しつつ、ICT機器や紙媒体での学習をバランスよく行うことができた。日常的な学習において、i P a dを活用し、筆順アプリ等を使った文字の学習や、カメラを使った植物の観察等の学習活動を行うことができた。インターネットを使った調べ学習や、インターネットからの特別警報等の情報の受け取り方など、自身でできるICTの活用についても重点を置いて指導することができた。また、生徒の年齢層を問わず、個々の日本語の習得状況に応じてA Iドリルを積極的に活用することができた。高齢の生徒もi P a dやA Iドリルを使った学習について積極的な方が多く、月の動きの動画を検索するなど、自主的に活用する姿勢も見られた。3学期から新たに電子黒板が設置されたことも踏まえ、今後さらにICTを活用した学習の在り方を検討していきたい。

今年度から特別支援学級が設置されたことに伴い、仕事の都合でなかなか登校できない支援学級に在籍する生徒がi P a dを持ち帰り、支援学級担当とチャット機能を使って課題のやり取りをすることも始めることができた。